

スピノザ『エチカ』におけるコナトゥスの定位  
—— 活動としてのコナトゥスと精神の現実的本質 ——

スピノザはその主著『エチカ』第四部命題 22・系において、「自己保存のコナトゥスは、徳の第一かつ唯一の基礎である」と述べていた。また、ここに「至福は徳の報酬ではなく、徳そのものである」という『エチカ』第五部命題 42 を重ね合わせるなら——これは同書における最後の命題である——コナトゥスは徳の基礎であると言われる限り、また至福の基礎とも言われることになるだろう。だとするなら、『エチカ』という著作全体におけるこの概念の重要性は、疑いないものと言ってよい。『エチカ』における最後の主題が精神の自由と至福にあったことを見ても、このことは明らかである。

しかし、この「コナトゥス (conatus)」とは何であろうか。もう少し言うならば、この伝統的な概念を、スピノザ自身はどのようにして捉えていたのだろうか。先の引用からも分かるように、スピノザにおいてコナトゥスという概念が事物の自己保存に関わっていることは間違いない。しかし、何故コナトゥスが事物の自己保存を可能ならしめるのか——その理論は、『エチカ』のみからでは必ずしも明らかではない。

本発表の第一の目的は、『エチカ』におけるコナトゥスの定位を、彼の初期著作である『形而上学的思想』を参照することで明らかにすることである。またこの時、注目されるべきは、事物とその当の事物のコナトゥスとの区別を、スピノザが言葉上のものであると述べ、「事物そのものにおいては (re ipsa)」区別されない、と語っている点である。このスピノザの主張を、コナトゥスが事物の現実的本質 (essentia actualis) であるという『エチカ』のテーゼに結びつくものとして本発表は取り上げる。

また第二に、本発表はコナトゥス=現実的本質という上述のテーゼを、「運動と静止 (motus et quies)」という概念に接続することを試みる。この運動と静止とは、スピノザ自身が語るところによれば、神の本性から無媒介的に生じる事物の多様性の (延長属性における) 原理であり、また他方では (延長属性における) 個物の形相とも目されるものである。この接続によって、本発表はスピノザの存在論がその原理として有する、神の活動という側面を明示したい。さらにここから、延長属性におけるコナトゥスが、運動と静止という活動において理解されることを本発表は示すだろう。

最後に本発表は、コナトゥス=現実的本質、神の活動、というこれらの論点が思惟属性における議論でも貫徹されていることを明らかにする。スピノザは観念という思惟属性における存在者 (この中には我々の精神も含まれる) が、意志作用と同一である、と述べていた。このことを踏まえて、本発表は精神のコナトゥス=現実的本質として、意志作用、より一般的には肯定作用がスピノザの体系において位置づけられることを示す。

先述の通り、『エチカ』最後の主題は精神の至福である。これを扱う時、我々は恐らく精神を含めた、事物のコナトゥスというものを考えねばならない。本発表は『エチカ』におけるコナトゥスの定位を全面的に取り扱い、その必要に応えようとするものである。